

コロナ禍にオンライン授業と対面授業の両方を受講した学生による授業評価

橋本 和幸¹⁾

了徳寺大学・教養部¹⁾

要旨

本研究は、コロナ禍で行われたオンライン授業と対面授業を大学生に評価させたものである。調査協力者に、各授業の良かった点と悪かった点を自由記述で回答させた。この自由記述による回答を、KJ法を参考に分類・整理した。この結果、【授業内容に集中できる】【授業内容に集中できない】【大学側に準備がある】【大学側に準備がない】【学生側の準備の問題】【人とのつながりがある】【人とのつながりがない】【ウイルス感染リスク】【通学時間の問題】【なし】という10個の大カテゴリが抽出された。

カテゴリ同士の関係は次の通りであった。①対面授業に集中できると、他者とのつながり、大学の準備、感染リスクが気にならなかった。②オンライン授業に集中できると、通学時間がいらぬことや大学の準備の悪さが気になった。今後の課題は、学部・学科や学年による共通点や相違点を把握するために、調査協力者を増やすことであると考える。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、オンライン授業、対面授業、大学生

The academic survey by students who have taken both online instruction and face-to-face instruction by the spread of COVID-19

Kazuyuki Hashimoto¹⁾

Center of Liberal Arts Education, Ryotokuji University¹⁾

Abstract

This study evaluated online instruction and face-to-face instruction by university students in the spread of COVID-19. The subjects answered the good points and bad points of each lesson by free descriptions. These free descriptions were classified and organized by K. J. technique. As a result, the following ten major categories were established. They were “I can concentrate on the instruction”, “I can't concentrate on the instruction”, “There is preparation on the university side”, “There isn't preparation on the university side”, “Student are not ready”, “Interact with others”, “No interaction with others”, “Infect with virus”, “Time to go to school”, “none”. In conclusion, the study could be summarized in the two focuses. First, Students were less concerned about connecting with others, preparing for college, and risking infection when they could concentrate on face-to-face lessons. Secondly, Students were worried about not needing time to go to school and poor university preparation when they could concentrate on online instruction. The future task is to increase the number of collaborators in the survey in order to understand the commonalities and differences between faculties / departments and grades.

Keyword : COVID-19, online instruction, face to face instruction, university students

1. 問題

2020年は大学教育の在り方が大きく変わった年であった、と後に言われるかもしれない。世界保健機構(WHO)が2020年1月5日に中国武漢市における原因不明の肺炎発生を初めて報告し、3月11日にはパンデミック宣言を行った新型コロナウイルスによる感染症(COVID-19)の拡大は、日本の学校教育にも大きな影響を与えた。感染拡大防止のために様々な行動制限を求められる中で、全国の小中高・特別支援学校は2月27日に政府から一斉臨時休校が要請された。その時点では含まれなかった大学及び高等専門学校は、3月24日付の「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」において、「学生の学修機会を確保するとともに、感染リスクを低減する観点から」面接授業に変えて遠隔授業を行うことを求められた。¹⁾これを受けて多くの大学が遠隔授業を実施することを選択し、文部科学省によれば5月20日の時点では90%の大学及び高等専門学校で実施され、7月1日時点でも遠隔授業単独が23.8%、60.1%で面接授業との併用が60.1%にのぼった。²⁾³⁾

筆者の勤務先(以下、本学)でも、3月末から遠隔授業の導入について議論され、教員の講義はテレビ電話会議システムZoomを、資料の配布や課題の提出はGoogle Classroomをそれぞれ用いた双方向型遠隔授業が実施されることとなった。準備のために、前期の授業開始を通常よりも1か月遅れの5月の連休明けとして、前期の終了は8月の中旬となった。そして、後期は例年通り9月の中旬から開始し、原則として対面授業を行うこととなった。ただし、状況に応じてオンライン授業や、対面授業とオンライン授業を同時に行うハイブリッド授業を併用して行った。なお、2021年度は前年度後期の方法を踏襲している。

つまり、2020年度に本学に入学した学生は、大学の授業がどのようなものかという経験がないままに、オンライン授業と対面授業の双方を経験することとなった。このため、大学における対面授業とオンライン授業の良かった点と悪かった点を先入観なしに回答できるのではないかと考えられる。

また、2020年度は少しでも早く授業を再開するために、大学も学生も手持ちのリソースを用いて取り急ぎオンライン授業を開始し参加した。その結果、どの大学でも授業に少なからず不備が発生した可能性がある。そこで、学生によるオンライン授業と対面授業の授業評価を蓄積することで、今後オンライン授業を継続する場合に、学生は無理なく効果的に受講できて、大学は効率的に実行できるものに精錬させられるのではないかと考えて、本研究を行うこととした。

COVID-19が拡大する状況下でのオンライン授業を検討した先行研究には、例えば次のものがある。教員対象の調査は、間淵ほか⁴⁾ではオンライン授業のメリットとして、課題や資料の提示がスムーズにできることや学生へのフィードバックがしやすいことが挙げられていた。デメリットとして、学生とのインフォーマルなコミュニケーションや学生同士の討論が困難であることが挙げられていた。また、オンライン授業の実施のためには教員にもサポートが必要であるとしている。

一方学生対象の調査では、田中(2021)⁵⁾では学生の自由記述から、オンライン授業のメリットとして授業の見直しや配信を一時停止してメモを取ることが可能であること、通学時間の削減を挙げている。デメリットとしては、課題の多さ、自己管理の難しさ、内容理解の不足、教員や学生同士の交流の不足、モチベーションの低下、健康面への悪影響などを挙げている。辛島(2021)⁶⁾では、学部2年生以上にオンライン授業と対面授業の比較を調査した結果、2,3年生の過半数がオンライン授業の方が総学習時間が増えたと答えた。しかし、オンライン授業で学習効果やコミュニケーションの機会が増加したと考える学生は少なかった。平林(2020)⁷⁾では、学生がオンライン授業の継続を希望するか否かは、授業を効率よく受けられるメリットと孤立感を覚えるデメリットのどちらを強いか左右されると述べている。そこで、学生の孤独感の軽

減を目指して、テレビ電話システムを使って教員に質疑応答をしたり学生同士でグループワークをしたりする実践が行われている。⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾

本学のような医療系資格の取得を目指す大学・学校の実践については、例えば望月(2020)¹²⁾では、オンライン授業の良かった点として、通学時間を他の時間に充てることができること、板書やテキストを見やすいことなどが挙げられた。一方改善点として、配布資料を自分で印刷する必要があること、インターネット環境が悪く見づらい聞きづらいこと、ノンバーバル・コミュニケーションの不足などが挙げられた。印刷が必要となることは少数意見ではあるが田中⁵⁾でも挙げられた。また、ノンバーバル・コミュニケーションは、話の内容ではなく伝え方であり¹³⁾、一般に実際に対面しないと実行が難しいものである。こうしたコミュニケーションの不足は、集中力や意欲の低下につながる恐れがある。さらに、本学と同じ理学療法士の養成校の調査¹⁴⁾では、学生はウイルス感染と就職活動に強い不安を覚えていた。一方、オンライン授業については、内容理解の不足とICT機器の操作に不安を感じていた。

学生の受講環境については、加納(2020)¹⁵⁾は5つの大学の調査で、インターネットに接続する通信機器は98%の学生が、パソコンは95%の学生がそれぞれ所持しており、オンライン授業実施の準備はできていると結論付けている。しかし辛島⁶⁾では、理系学生はほとんどがパソコンを所持しているが、文系学生は1割以上がパソコン以外のICT機器で受講していることが明らかになり、学部・学科によりパソコンリテラシーに違いがあった。また、加納¹⁵⁾で挙げられている通信機器はデータ使用量に制限がある機器とない機器が混在しており、制限がある場合には望月¹²⁾で挙げられたインターネット接続の問題が発生し、受講しづらい可能性がある。参考に筆者は2020年度に本学を含めて複数の大学・学校でオンライン授業を行った際に、授業開始前に受講に使うICT機器を確認した。この結果、A大学（本研究の調査対象校）ではパソコン61.5%、タブレット端末14.5%、スマートフォン23.9%、B大学（文系）ではパソコン90.7%、タブレット端末6.5%、スマートフォン2.8%、C大学（理系と芸術系）ではパソコン94.1%、スマートフォン5.9%、D大学（文系・理系両方）ではパソコン84.0%、タブレット端末14.0%、スマートフォン10.0%であり、大学により差があることが推測された。

以上をまとめると、オンライン授業と対面授業に関わる問題は、次のものが挙げられる。

- 1) オンライン授業のメリットとして、通学時間がかからないことを挙げる学生がいた。
- 2) オンライン授業を自宅等で受講することには、集中できるというメリットと孤独感を覚えるというデメリットの両面があった。
- 3) オンライン授業実施に必要なICT機器等は、ほとんどの学生が所持しているようであるが、その性能に格差がないか検討する必要がある。
- 4) オンライン授業で使用する資料が多すぎると、学生に視聴による身体的負担や印刷による経済的負担が発生する恐れがある。
- 5) 対面授業では、教員-学生間および学生同士のコミュニケーションをスムーズに取ることができるが、オンライン授業では難しい。

こうした問題が本学のオンライン授業および対面授業では起きたのかなどを調査することを本研究の目的とする。このために、本研究では自由記述による回答を求めることで、上記の先行研究の結果との共通点と相違点を検討し、オンライン授業及び対面授業の課題を探索的に明らかにしようとする。

2. 方法

(1) 倫理審査について

本研究は、調査実施者が所属する機関で倫理審査を受けて承認された内容に沿って実施した（研究倫理番号21-07）。

(2) 調査時期と調査対象者

A大学A学部A学科の2年生（2020年度入学生）を対象とした。

調査時期は、2021年7月19日から調査実施のアナウンスを行い、後述の方法による説明で協力を申し出た学生に、質問紙を配布し回答・提出してもらった。アナウンスと配布・回収は、2021年7月19日から8月9日まで行った。

この結果、79名（女性28名、男性51名）が分析対象となった。平均年齢は19.35歳（標準偏差0.48）であった。

(3) 調査用紙の配布方法

調査協力者の募集や調査の実施は、授業時間外に次の手順で行った。

- 1) 掲示物や配布物で調査実施をアナウンスし、調査協力者を募った。
- 2) そのうえで調査に協力しても良いと考えた学生は、授業時間外に調査実施者から調査用紙を受け取った。
- 3) 調査用紙のフェイスシートには、その内容を確認したうえで納得したら回答するように記載した。
- 4) 回答は調査協力者が各自で授業時間外に行った。
- 5) 調査用紙の提出は、調査実施者の研究室前に設置された回収箱に任意の時間に投函することで行った。

(4) 調査内容

対面授業を受講して良かった点と悪かった点、オンライン授業を受講して良かった点と悪かった点をそれぞれ自由記述で回答させた。

3. 結果

(1) 分析の手続き

調査協力者それぞれの回答内容を、KJ法¹⁶⁾を参考にしながら、次のように分類・整理した。

- 1) 調査協力者の記述をある一つのまとまった活動や出来事ごとに分けた（単位化）。
- 2) 分けられた記述内容にその内容にふさわしい名前（ラベル）をつけた（圧縮化）。例えば、ある調査協力者の「友達とわからないことを相談したりして授業に取り組むことができた」という回答には、『友人と相談できる』とラベルを付けた。
- 3) ラベルの内容が似ているもの同士を集め、それらを統合する名前をつけて小カテゴリとした（小グループ編成）。
- 4) 小カテゴリをさらに関連の深いもので集めて、大カテゴリを作成した（大グループ編成）。
- 5) 各カテゴリの意味関係を文章化と構図化により関係付けを行った。
- 6) この作業を調査協力者ごとに行い、ラベルやカテゴリの名前とその内容について関係付けをした図

を作成した。

(2) ラベルの生成

1) 対面授業で受講して良かった点

「対面授業で受講して良かった点を教えてください」からは108個のラベルが得られた（ラベルは『 』でくくった）。その内訳は、『集中できる』26個、『聴きやすい』13個、『友人と相談できる』12個、『授業者の工夫』11個、『教員に質問しやすい』9個、『他の人と一緒に受講できる』7個、『緊張感がある』7個、『わかりやすい』7個、『配布資料がもらえる』5個、『映写資料が見やすい』4個、『教員に会える』2個、『友人ができた』1個、『友人に会える』1個、『学びがあった』1個、『図書館が利用できる』1個、『なし』1個であった。

表1 対面授業を受講して良かった点のラベル

ラベル	回答例
集中できる	オンラインでの授業よりも対面での授業の方が集中できたため、より内容を理解することができた
聴きやすい	実際に聞くことで、自然と耳に入りやすかったです
友人と相談できる	友だちとも教えあえた
授業者の工夫	みんなの反応を見ながらスライドを変えたりなど授業の進行の調節が上手だと感じました
教員に質問しやすい	先生にすぐに質問することができる
他の人と一緒に受けられる	先生や友達と同じ空間で授業が受けられる
緊張感がある	多少、緊張感があり、集中力が高かった
わかりやすい	授業内容が頭に入りやすかった
配布資料がもらえる	プリントが印刷してある状態でもらえる
映写資料が見やすい	大画面で見るのに分かりやすかった
教員に会える	先生と会える
友人ができた	友達が出来た
友人に会える	友達に会えるので、モチベーションが上がる
学びがあった	学びがあった
図書館が利用できる	教科書以外の資料を図書館で利用できる
なし	なし

2) 対面授業で受講して悪かった点

「対面授業で受講して悪かった点を教えてください」からは87個のラベルが得られた。その内訳は、『なし』22個、『感染の不安』14個、『通学時間がかかる』13個、『周りの声がうるさい』12個、『映写資料が見えにくい』7個、『友人との私語』5個、『教室の環境』4個、『録画が観られない』3個、『教員に質問しづらい』2個、『集中できない』2個、『授業者の問題』2個、『周りの目が気になる』1個であった。

表2 対面授業を受講して悪かった点のラベル

ラベル	回答例
なし	なし
感染の不安	周りとの距離が近くて密だと思った
通学時間がかかる	行く時間がかかる
周りの声がうるさい	周りの声が騒がしい
映写資料が見えにくい	後ろの席だとスライドが見えにくいことがある
友人との私語	友達との座席が近かったため雑談も多くなってしまった
教室の環境	教室が寒い
録画が観られない	スライドを見逃してしまうと戻って見れない
教員に質問しづらい	質問しにくい（授業中に）
集中できない	楽をしていたせいで一部聞いていなかった
授業者の問題	良い点の反面、少し間が長い時があり、もう少し短くてもいいと思います
周りの目が気になる	周りの目がきになる

3) オンライン授業で受講して良かった点

「オンライン授業で受講して良かった点を教えてください」からは97個のラベルが得られた。その内訳は、『通学時間不要』34個、『環境が快適』14個、『感染リスク軽減』9個、『映写資料が見やすい』9個、『録画が観られる』8個、『周りの声がない』5個、『集中できる』4個、『教員に質問しやすい』3個、『授業者の工夫』3個、『なし』3個、『調べ物やまとめを並行してできる』3個、『聴きやすい』1個、『配布資料をダウンロードできる』1個であった。

表3 オンライン授業を受講して良かった点のラベル

ラベル	回答例
通学時間不要	登校する時間が無くなるため、授業の予習・復習にあてる時間を長くとることができた
環境が快適	楽な体勢で受けられる
感染リスク軽減	家で受けれたのでコロナになる心配が少なくなり、授業に安心して受けれた
映写資料が見やすい	スマホになれていると楽にうけれる
録画が観られる	授業は録画で見返して復習することができる
周りの声がない	まわりの人の声が聞こえず、1人で受けていたので集中できた
集中できる	1人の環境で集中して行うことができた
教員に質問しやすい	授業内で質問しやすかった
授業者の工夫	オンラインだと家で授業を受けるので、だらけがちですが、先生のスライドがみやすく分かりやすかったので授業が楽しかった
なし	なし
調べ物やまとめを並行してできる	分からないところは、すぐに調べられる
聴きやすい	より聞きやすい
配布資料をダウンロードできる	休んでしまった時に資料が掲示されているので、資料をもらいにいく手間が省ける

4) オンライン授業で受講して悪かった点

「オンライン授業で受講して悪かった点を教えてください」からは113個のラベルが得られた。その内訳は、『集中できない』26個、『インターネット接続の問題』25個、『配布資料を自分で印刷する必要がある』16個、『緊張感がうまれない』16個、『授業を受けた実感が持てない』6個、『なし』5個、『目が疲れる』5個、『孤独である』4個、『教員に質問しづらい』3個、『教員の様子がわからない』3個、『友人と相談できない』2個、『授業についていけない』2個、『友人ができない』1個であった。

表4 オンライン授業を受講して悪かった点のラベル

ラベル	回答例
集中できない	集中力がきれてしまう
インターネット接続の問題	ネット環境が悪いと、授業に参加できなかったり途中で切れてしまうことがあった
配布資料を自分で印刷する必要がある	資料を自分で印刷しなければいけないところ
緊張感がうまれない	家だからゆったりしてしまう
授業を受けた実感が持てない	家で1人だということもあると思うが、授業を受けている感じがあまりなかった
なし	なし
目が疲れる	目が疲れる
孤独である	一人ぼっちが寂しかった
教員に質問しづらい	質問がしづらい
教員の様子がわからない	チャットが送れているか不安だった
友人と相談できない	友達と話せないので、わからないところが質問できない
授業についていけない	スライドが変わるタイミングについていけないことがある
友人ができない	友達が最初できなかった

(3) グループ編成

1) 小カテゴリの作成

上記のラベルを質問ごとに小カテゴリにまとめた（小カテゴリは<>でくくった）。

①対面授業で受講して良かった点のラベル

「対面授業を受講して良かった点」から得られた108個のラベルは、次の6個のカテゴリにまとめた。

『集中できる』と『緊張感がある』は<集中しやすい>とまとめた。

『聴きやすい』『わかりやすい』『映写資料が見やすい』『学びがあった』は<授業内容が頭に入る>とまとめた。

『友人と相談できる』『他の人と一緒に受講できる』『友人ができた』『友人に会える』は<友人とのつながりがある>とまとめた。

『教員に質問しやすい』と『教員に会える』は<教員とのつながりがある>とまとめた。

『授業者の工夫』は<授業者の工夫>とした。

『配布資料がもらえる』と『図書館が利用できる』は<大学の環境整備がある>とまとめた。

『なし』は単独で小カテゴリとした。

②対面授業で受講して悪かった点のラベル

「対面授業を受講して悪かった点」から得られた87個のラベルは、次の8個の小カテゴリにまとめた。

『なし』と『感染の不安』と『通学時間がかかる』と『授業者の問題』は、それぞれ単独で小カテゴリとした。

『周りの声がうるさい』『友人との私語』『周りの目が気になる』は<友人からの悪影響>とまとめた。

『映写資料が見えにくい』と『録画が観られない』は<大学の環境整備がない>とまとめた。

『教室の環境』と『集中できない』は<集中しにくい>とまとめた。

『教員に質問しづらい』は<教員とのつながりがない>とした。

③オンライン授業で受講して良かった点のラベル

「オンライン授業を受講して良かった点」から得られた97個のラベルは、次の9個の小カテゴリにまとめた。

『通学不要』と『感染リスク軽減』と『授業者の工夫』と『なし』は、それぞれ単独で小カテゴリとした。

『環境が快適』『調べ物やまとめを並行してできる』は<学生が環境整備する>とまとめた。

『周りの声がない』『集中できる』は<集中しやすい>とまとめた。

『映写資料が見やすい』『聴きやすい』は<授業が頭に入る>とまとめた。

『録画が観られる』と『配布資料をダウンロードできる』は<大学の環境整備がある>とまとめた。

『教員に質問しやすい』は<教員とのつながりがある>とした。

④オンライン授業で受講して悪かった点のラベル

「オンライン授業を受講して悪かった点」から得られた113個のラベルは、次の6個の小カテゴリにまとめた。

『インターネット接続の問題』と『配布資料を自分で印刷する必要がある』は<学生側の設備がない>とまとめた。

『集中できない』『緊張感がうまれない』を<集中しにくい>とまとめた。

『授業を受けた実感が持てない』『授業についていけない』『目が疲れる』を<授業内容が頭に入らない>とまとめた。

『教員に質問しづらい』『教員の様子がわからない』を<教員とのつながりがない>とまとめた。

『孤独である』と『友人と相談できない』を<友人とのつながりがない>とまとめた。

『なし』は単独で小カテゴリとした。

2) 大カテゴリの作成

上記の小カテゴリ20個を大カテゴリ10個にまとめた（大カテゴリは【】でくくった）。

<集中しやすい>と<授業内容が頭に入る>を【授業内容に集中できる】とまとめた。

<集中しにくい>と<授業内容が頭に入らない>と<友人からの悪影響>を【授業内容に集中出来ない】とまとめた。

<大学の環境整備がある>と<授業者の工夫>を【大学側の準備がある】とまとめた。

<大学の環境整備がない>と<授業者の問題>を【大学側の準備がない】とまとめた。

<学生側の設備がない>と<学生が環境整備する>を【学生側の準備の問題】とまとめた。

<友人とのつながりがある>と<教員とのつながりがある>を【人とのつながりがある】とまとめた。

<友人とのつながりがない>と<教員とのつながりがない>を【人とのつながりがない】とまとめた。

<感染の不安>と<感染リスク軽減>を【ウイルス感染リスク】とまとめた。

<通学時間がかかる>と<通学不要>を【通学時間の問題】とまとめた。

<なし>は【なし】とした。

ラベルとカテゴリの関係は、表5の通りである。

表5 ラベルのカテゴリ化

(4) 各カテゴリの関係付け

各カテゴリの内容とその関連から、次の4点が言えるのではないかと考えられる。

大カテゴリ	小カテゴリ	ラベル	
授業内容に集中できる	集中しやすい	集中できる	
		緊張感がある	
		周りの声がない	
	授業内容が頭に入る	聴きやすい	
		わかりやすい	
		映写資料が見やすい	
授業内容に集中できない	集中しにくい	教室の環境	
		集中できない	
		緊張感が生まれにくい	
	授業内容が頭に入らない	授業を受けた実感が持てない	
		授業についていけない	
		目が疲れる	
	友人からの悪影響	周りの声がうるさい	
		友人との私語	
		周りの目が気になる	
	大学側の準備がある	大学の環境整備がある	配布資料がもらえる
			図書館が利用できる
			録画が見られる
配布資料がダウンロードできる			
	授業者の工夫	授業者の工夫	
大学側の準備がない	大学の環境整備がない	映写資料が見にくい	
		録画が見られない	
	授業者の問題	授業者の問題	
学生側の準備の問題	学生側の設備がない	インターネット接続の問題	
		配布資料を自分で印刷する必要がある	
	学生が環境整備する	環境が快適	
		調べ物やまとめを並行してできる	
人とのつながりがある	友人とのつながりがある	友人と相談できる	
		他の人と一緒に受講できる	
		友人ができた	
	教員とのつながりがある	友人に会える	
		教員に質問しやすい	
		教員に会える	
人とのつながりがない	友人とのつながりがない	孤独である	
		友人と相談できない	
	教員とのつながりがない	教員に質問しづらい	
		教員の様子がわからない	
ウイルス感染リスク	感染の不安	感染の不安	
	感染リスク軽減	感染リスク軽減	
通学時間の問題	通学時間がかかる	通学時間がかかる	
	通学不要	通学不要	
なし	なし	なし	

- 1) 対面授業は【授業内容に集中できる】と考えると、対面授業での【人とのつながり】や【大学側の準備がある】あるいは【大学側の準備がない】ことや、オンライン授業で<感染リスク軽減>されることに関心を持たない傾向にあった。
 - 2) オンライン授業は【授業内容に集中できる】と考えると、オンライン授業が<通学不要>であることにメリットを感じ、オンライン授業における【大学側の準備】の悪さが気になった。
 - 3) オンライン授業で【人とのつながり】を肯定的にとらえていると、【人とのつながり】が制限されることを否定的にとらえていた。
 - 4) 対面授業で<感染の不安>を感じている学生は、オンライン授業で<感染リスク軽減>されるメリットを感じていた。
- 以上のことを図1のようにまとめた。

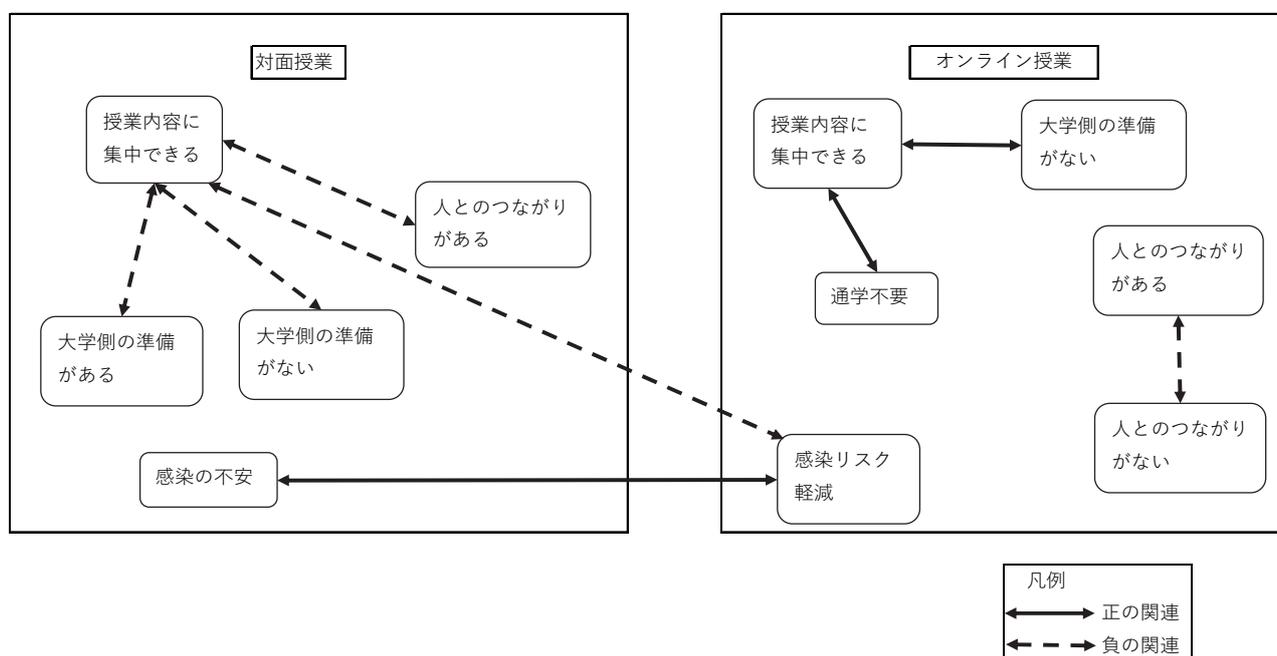


図1 調査協力者79名の回答のまとめ

4. 考察

(1) 抽出されたラベルやカテゴリから見たオンライン授業

本研究では、オンライン授業で良かった点として最も多かったものは通学時間が不要ということだった。先行研究では田中⁵⁾の自由記述に少数意見として挙げたのみであった。これは他の先行研究では教員がオンライン授業の利点として想定しなかったために選択肢になかったために把握されなかったが、本研究や田中のような自由記述であれば回答される可能性があったのではないかと考えられる。次に回答が多かった「環境が快適」は、「周りの声がない」や「集中できる」と併せると、平林⁷⁾で挙げられたオンライン授業は授業を効率よく受けられるに通じるものがあると考えられる。しかし、集中できる環境を用意できないと、「集中できない」「緊張感が生まれにくい」「授業を受けた実感が持てない」など受講に支障をきたしていると感じており、田中⁵⁾で「自己管理の難しさ」とされたものに通じるのではないかと考えられる。

そして、大学も学生も準備期間が短いうえ、手持ちのインターネット接続環境やICT機器を用いてオンライン授業に対応していたため、先行研究¹²⁾でも指摘されているように、主にインターネット接続の問題

で授業内容の聞き取りづらさ、ICT機器がスマートフォンなどであることによる映写資料の見えにくさを訴えていた。先行研究では、加納¹⁵⁾はほとんどの学生のインターネット接続環境やICT機器はそろっているとしているが、辛島⁹⁾は理系学生と文系学生でパソコン使用に差があるとしている。問題で参考に記載した筆者の経験では、4つの大学のうち3大学では加納や辛島の結果とほぼ同じく9割以上の学生がパソコンで受講していたが、A大学ではパソコンを使わない学生が4割近くいた。このことから、機器の問題は大学・学校ごとに大きな差があり、本研究の対象となったA大学では先行研究の対象となった大学に比べて大きな問題になっていた可能性がある。

また、配布資料を授業ごとに学生自身で印刷することに負担を感じるという回答が見られた。筆者が視聴に利用するICT機器と同様に授業開始前に受講生に行った調査結果を参考に述べると、配布資料を印刷できるか否かは、A大学で可69.1%否30.9%、B大学で可87.0%否13.0%、C大学で可84.3%否15.7%であった。可と回答した学生の内訳（3大学の平均）は、即時印刷できるが56.6%、前日までにアップロードされれば印刷して手元に準備できるが29.5%、2日前までにアップロードされれば印刷して手元に準備できるが14.2%であった。即時印刷できない学生に事情を尋ねると、自宅にプリンタがないためコンビニのマルチコピー機や大学や実家のプリンタで印刷する時間が必要とのことであった。またプリンタを持っていても、紙とインクの消費が急増し苦労しているとの回答があった。以上より、間淵ほか⁴⁾では、教員側はオンライン授業の資料準備を負担に感じていなかったが、学生側はそうではなかった可能性があると考えられる。

以上のような学生の負担を考慮して、インターネット接続の問題や使用するICT機器の性能の問題を最小限に抑えるために、配信する情報量を絞り、インターネット接続の問題が生じないように、Zoomのカメラを全員オフにして、画面共有と音声のみで授業を行う方法を採用ことや、プリンタ所有の有無に配慮して配布資料は紙媒体ではなく電子媒体で用意し、それを見ながら授業を受けられるように工夫する必要と考えられる。このような授業者の意図を、本研究の調査協力者たちの複数名が理解し、＜授業者の工夫＞という小カテゴリにつながる回答をしていたのではないかと考えられる。

(2) 抽出されたラベルやカテゴリから見た対面授業

まず、対面授業を受講して良かった点で最も多かった回答は、『集中できる』『聴きやすい』であり、対面授業という大学入学以前から慣れ親しんでいる授業形態が安定して提供されれば、落ち着いて授業を受けられると感じているのではないかと考えられる。そして、『友人と相談できる』『教員に質問しやすい』というフォーマルなコミュニケーションができることとともに、『他の人と一緒に受講できる』『教員に会える』『友人ができた』『友人に会える』のようにインフォーマルなコミュニケーションをとれることも良かったと回答していた。こうした他者との交流はオンライン授業では不足することが多くの先行研究でも指摘されており⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾、対面授業の利点であることが改めて明らかになったものと考えられる。また、配布資料を印刷する負担や映写資料の見にくさは、大学で準備してくれることでなくなり、対面授業の利点ととらえられていた。

一方対面授業を受講して悪かった点は、『なし』が最も多く対面授業への不満は少ないのではないかと推測する。『なし』を除いて最も多かった回答は『感染の不安』と『通学時間がかかる』であり、他者と同じ空間にいることや移動によりかかるストレスについてであった。感染の不安は広瀬ほか¹⁴⁾では触れられていたが、通学時間がかかることを検討した先行研究は引用した中には見られなかった。このことから、感染の不安や通学時間については、学生と教員で重要度が異なるのではないかと考えられる。さらに、『周

りの声がうるさい』『映写資料が見にくい』『友人との私語』『教室の環境』『集中できない』のように、周りに他の人がいたり自分が受講しやすい環境を自由に行うことができなかつたりすることなどにより、授業に集中できないと感じている学生もいた。これは平林⁷⁾でオンライン授業は集中しやすいと回答した学生と表裏一体とも考えられる。

(3) 今後の課題

本研究の結果から、次の2点が課題として残された。

第一に、結果の数量化という課題がある。本研究では自由記述の結果をカテゴリ分けする作業を行った。こうして得られたそれぞれの授業形態のメリットとデメリットを、自由記述では回答しなかった学生がどのように考えているかを検討する必要がある。このためには、調査協力者に負担はかかるが各カテゴリを質問項目にして選択肢で回答してもらう量的な研究を行って、先行研究などと比較することも必要であるものと考ええる。

第二に、調査協力者を多様化する必要がある。今回は医療系の資格取得を目指す学科の1つの学年を対象とした。学部・学科の違いによりパソコンやネットのリテラシーに違いがあること⁶⁾や、同じ学科でも座学中心の学年と実技の授業や実習がある学年では不安に差があることが示唆されている¹⁴⁾ことなどから、調査協力者の属性を複数用意して比較することも必要ではないかと考える。

(4) まとめ

本研究の結果からは、高校以前から慣れている対面授業の良かった点を改めて実感する回答が多かったものと考えられる。しかし、ウイルス感染に不安が強いと、感染リスクを減らせるオンライン授業の良さを強く感じたのではないかと考えられる。

一方で、オンライン授業という未経験の授業形態については、周りを気にせず受講できるため授業内容に集中できることや、通学時間が不要で時間的・心理的負担が軽減されるという新たな気づきが生まれたと考えられる。しかし、そのためには授業内容を視聴しやすいインターネット接続環境やICT機器が必要になるが、全ての学生に同程度の環境が整っているとは限らないことを考慮する必要がある。

また、他者とのかかわりを重視する学生は、他者と対面できないオンライン授業には満足できない傾向にあった。こうした問題の解決のためには、学生同士の話し合いや教員と話をできる時間など、オンライン上でも他者とかかわる機会を用意する必要があるものと考えられる。

5. 文献

- 1) 文部科学省 (2020a) 令和2年度における大学等の授業の開始等について (通知) https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2021年10月26日閲覧)
- 2) 文部科学省 (2020b) 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (5月27日発信) https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (2021年10月29日閲覧)
- 3) 文部科学省 (2020c) 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (7月17日発信) https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021年10月29日閲覧)

- 4) 間淵泰尚・中植正剛・酒井純 (2020) 新型コロナ禍で見直す大学の授業の在り方ーオンライン授業に関する教員アンケート結果よりー, 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要, (6), 19-28.
- 5) 田中希穂 (2021) 大学におけるオンライン授業の実践と課題, 同志社大学教職課程年報, (10), 48-62.
- 6) 辛島光彦 (2021) コロナ禍対応のオンライン授業に対する理系学生の意識調査ー文系学生の意識調査との比較ー, 東海大学紀要情報通信学部, 14, 1-9.
- 7) 平林信隆 (2020) コロナ禍における大学のオンライン授業に対する新入生の認識についての探索的研究, 共栄大学研究論集, (19), 55-66.
- 8) 豊島かおる・宍戸史・目時孔仁ほか (2020) パンデミック下の“新しい教育様式”, 医学教育, 51(3), 222-223.
- 9) 小松弘幸 (2020) コロナ禍の渦中で思うこと…「過ぎたるは及ばざるが如し」, 医学教育, 51(3), 234-235.
- 10) 西屋克己・唐牛祐輔・野村昌作ほか (2020) コロナ禍における関西医科大学医学部ICTを活用した教育戦略, 医学教育, 51(3), 238-239.
- 11) 駒澤伸泰・寺崎文生・佐浦隆一ほか (2020) 新型コロナウイルスパンデミックに対する自己省察レポート課題の実施と意義, 医学教育, 51(3), 274-275.
- 12) 望月崇司 (2020) オンライン授業の導入と今後の課題ーオンライン授業と対面授業の比較から得られた課題とはー, 成田会・研究ジャーナル, (2), 19-36.
- 13) 橋本和幸 (2020) 相談・指導のための面接技法, ムイスリ出版, 東京.
- 14) 広瀬環・屋嘉比章紘・小野田公ほか (2020) 新型コロナウイルス感染症による活動制限が理学療法科学部における大学生生活の不安感に及ぼす影響ー授業, 臨床実習, 就職活動に着目した報告ー, 理学療法科学, 35(6), 911-915.
- 15) 加納寛子 (2020) コロナ禍における高等教育でのオンライン授業の可能性についてー学生のオンライン授業のための通信環境とICT機器の所有状況に関する調査よりー 日本科学教育学会第44回年会論文集, 521-524.
- 16) 川喜多二郎 (1967) 発想法, 中央公論新社, 東京.

謝辞

調査に協力してくれた学生たちに感謝します。

2021年12月24日 受理
了徳寺大学研究紀要 第16号